

**札幌新まちづくり計画市民会議  
環境・都市機能分科会第1回会議概要録**

**日 時** 平成15年12月10日(水) 18:00~20:30

**場 所** 札幌すみれホテル 3階 ヴィオレ

**出席者** 小林英嗣 会長  
大坂 紫 委員 ・中井和子 委員 ・中島 洋 委員 ・林 雅之 委員  
(欠席:太田幸雄 委員)

**次 第**

- 1 開 会
- 2 会長あいさつ
- 3 議 事
  - (1) 分科会の進め方について
  - (2) 確認事項(委員提出メモの扱いなど)
  - (3) 事務局説明(配布資料など)
  - (4) 意見交換(現状と課題など)
  - (5) 議論のまとめと次回の議題確認
  - (6) 副会長指名
  - (7) その他
- 4 閉 会

**議事の概要**

最初に、分科会の進め方と委員提出メモの扱いについて確認した。今後は資料1に沿って会議を進めていくとともに、委員提出メモは、委員に確認のうえ原則公開することが確認された。

次に、事務局から以下の事柄について資料に基づき説明がなされ、質疑応答と活発な意見交換が行われた。

- ・「札幌市新まちづくり計画」に関連する主な個別計画・審議会等(資料2、2の1)
- ・ビジョン編構成イメージ〔再掲〕(資料3)
- ・基本目標と重点戦略課題〔再掲〕(資料4)
- ・現状と課題(資料5)

最後に副会長に中井和子委員が指名され、閉会となった。

## 意見交換の概要

### 委員提出メモの扱いについて

- ・ 原則として委員のメモはホームページ上で公開するが、委員の都合をその都度確認した上で公開、非公開を決めることとする。ただし、チラシや新聞のコピーなどは出典を記載するのみとする。

### 質疑応答（配布資料、分科会での議論の進め方について）

- Q 今、道を含め、日本全体で安全で安心な住環境をどうするかということを議論しようとしている。札幌市提出の「現状と課題」にこの項目はないが、これを含めて議論をしても構わないか。（小林会長）
- A 構わない。（事務局）
- Q 札幌市では環境基本計画の見直しをしているという話があった。また住民の環境に対する意識が非常に低いという調査結果があったが、そのことをどう考えているのか。（小林会長）
- A 環境基本計画改定の理由は、市民、企業とともに環境政策を推進していくという部分が弱いためである。具体的には、重点施策ごとの目標を全体的に推進していくために市民と企業を含めた強化策を盛り込む。また、計画策定、計画推進のチェック体制に市民に入ってもらうという議論がされている。（事務局）
- Q この分科会の重点戦略課題と環境の問題をリンクさせ「市民が自主的に交通手段を育成する施策を持つべき」と提言してもいいのか。（小林会長）
- A 構わない。（事務局）

### 意見交換

- ・ 新しいものと古いものが同居できるまちづくりを考えていきたい。JRタワーができたことで都心部のバランスは完全に崩れた。狸小路等の古い味わいのあるものが、さびれてしまっているのを何とかしなくてはならない。市場原理に任せていると、古いものがなくなっていく。（中島委員）
- ・ 古い建物を同じ形で別のことに再活用することができないか。外観が残ると精神的な安心感も大きい。（中島委員）
- ・ 都心部がモデル、シンボルになり地域に波及していくので、都心部は重要である。（中島委員）
- ・ フィルムコミッションが札幌市の将来、まちづくり計画に大きく関わってくると思うが、札幌から情緒ゆたかな建物やまちなみがどんどん消えていっているという映像関係者の指摘がある。（中島委員）
- ・ 情報発信は多く行われているが、市民に伝わっていないことが多い。（大坂委員）
- ・ ほっとできる、憩える場所、「スロースペース」がほしい。例えば地下通路がみんなが楽しく憩える場所になればいい。（大坂委員）
- ・ 「オープンカフェの椅子の数はそのまちの文化度を表す」とある人が言っていた。（小林会長）
- ・ コンパクトシティ実現に向けた本格的な議論が必要。（林委員）
- ・ 市民会議では、新まちづくり計画のどこにどのような具体的なことを盛り込むかを議論しなければならない。（小林会長）

- ・ コンパクトシティという言葉については誤解がある。そのため、今ではサスティナブルシティと呼ばれている。まちを小さくするというのではなく、どうやって環境負荷が少なく、安全でコミュニティが形成されるまちにつくり直していくのかということである。（小林会長）
- ・ 都心と並んで重要なのが、1960～1980年に形成されたゾーンである。このゾーンは人もコミュニティも少なくなっているが、社会基盤はしっかりしている。ここをどのように再生していくのが課題。（小林会長）
- ・ 市民がまちづくりに参加し考えるためには、象徴となるイベントのような刺激が必要。例えば、大通公園で植林をするというような。（中島委員）
- ・ 札幌駅と大通間の地下通路ができて地上の車が増えるというのは最悪。地上のモデルが考えられずに地下通路がつくられるのは問題がある。（中島委員）
- ・ 地下通路がパフォーマンスができるような溜まり場になればいい。通行が不便なくらいのほうで文化的なスペースとしての発想につながっていく。都心では効率で物事を考えないことも重要ではないか。（中島委員）
- ・ 駅前通から中島公園までの道路が歩行者天国になればいい。車優先でない道路が駅前にあるという抜群のシティセールスになる。（中島委員）
- ・ 「魅力ある都市」像が大事。歩いて楽しいまち、景観の美しいまち、安心・安全のまちなどが複合的に機能しながら、かつそこに人が住んでいるということが、都市として大切になる。（中井委員）
- ・ まちづくりを市民に浸透させるためには、市民が個人としてできることを示すことが必要。分かりやすい「まちづくり読本」のようなもの、疑問を感じたときに取っ掛かりになるようなツールが必要ではないか。（中井委員）
- ・ 地下空間やスカイウェイはロードヒーティングや除雪をしなくていいので、うまく連続すればエネルギー消費が少なく維持管理も楽な空間になる。（中井委員）
- ・ 札幌駅の南口には車と人を分離する人工地盤がなく、開放的な空間になっている。これは他の大都市と比較して大きな財産。これを活かすためにも、駅前通の緑化維持、再生は必要。（中井委員）
- ・ 地下通路化の際にサンクンガーデン的なつくり方にすれば、とても魅力的な空間になるのではないか。（中井委員）
- ・ 環境、交通、緑など、おのおのがうまくいけば都市の魅力が出てくるというわけではない。それぞれが統合されたときに魅力が出てくるということが大事。（中井委員）
- ・ 子供にまちづくりやまちを使う際のマナー教育をするのも大切。20年経つとまちのつくり方、使い方、センスが変わってくるだろう。（小林会長）
- ・ 札幌市の長期総合計画で広域交流拠点や地域中心核について書かれているが、何ら具体的な施策はなされていない。（小林会長）
- ・ 1960～1980年のエリアの質向上のためには広域交流拠点、地域中心核とのリンクも必要。（小林会長）
- ・ 地域で市民、企業が自分たちでスタンダードを決めて構わないというようにすると、市民が自分は何をやらなくてはいけないのかということに近づいていけるのではないか。（小林会長）

- ・ 連絡所の問題も含めて、市がすべてやるということではだめで、地域住民がどれだけ自主的にニーズを上げてくるかというバランスが重要。そのためには熱心な地区でモデルをつくるのが有効である。（中島委員）
- ・ 都心のモデルと地域におけるモデルの2本が常にあり、それを材料に市民が考えていくという形になる。（中島委員）
- ・ 進んでいるフィルムコミッションでは、ロケの1ヶ月前から地域の各戸にロケ内容、問い合わせ先が告知される。そのような情報の出し方、相談窓口の設け方により市民の意識も高まる。（中島委員）
- ・ 例えば仙台市では親しめるキャラクターによるゴミキャンペーンを行っている。また、アシードジャパンという団体は、イベント会場のゴミを減らすユニークな活動を行っている。市民や企業も一体となって取り組むには、そんな面白さ、とっつきやすさも必要ではないか。（大坂委員）
- ・ 連絡所は、市民が行動したいと思ったときに情報提供などの手助けができる拠点になればいいと思う。（大坂委員）
- ・ 退職した市職員がそこでサポートするということも考えられる。（小林会長）
- ・ 市民がアクションを起こせる場所があればいい。図書館が遅くまで開いていてもいい。公園などの施設の管理運営を市民団体がすることで、思いがけない活用がされるかもしれない。（大坂委員）
- ・ コンパクトシティに完成形はなく、常に進化を続ける取り組み。（林委員）
- ・ 仮に都心をターゲットとすると「まちなかの容積率アップ」のニーズが出てくるかもしれない。（林委員）
- ・ コンパクトシティの一つの効果に公共交通機関が利用しやすくなるということがあるので、車依存からの脱却が可能かもしれない。（林委員）
- ・ 容積率をアップすると車の量が増えるのは東京などの例を見ても明白。JRタワーという身近な例もある。（小林会長）
- ・ 車を締め出す具体例として、狸小路での荷捌き車の時間制限がある。ただ、一般市民の車がむしる問題ではある。車で行くと不便だということが具体的にできればその対策になる。（中島委員）
- ・ ぜひ公共施設の24時間開放を。ICC（札幌市デジタル創造プラザ）がすでに自主的管理で実現しているということもある。（中島委員）
- ・ 大通小学校はNPOなどの活動の場、まちづくり拠点として絶好の位置にある。この開放が実現すれば、まちづくりにとっても風通しのいいまちになる。（中島委員）
- ・ NPO活動を生涯教育の一環であり、スローエデュケーションであると言うと、札幌中心部にはスロースペースなどいろいろなスローが集まっているという考え方もできる。それが豊かな自然環境とセットになって、札幌中心部を再生していくときの哲学になるということも考えられる。（小林会長）
- ・ 以前、札幌市が創成小学校で行っていた成人学校はとてもいい取り組みだと思う。また、夜間中学もぜひつくってあげたい。（中島委員）
- ・ 「都心を24時間活用しよう」という言い方ができる。（小林会長）
- ・ 施設の24時間開放は省エネ、地球環境問題には逆行しているのではないか。その整合性を取る方法はないか。（中井委員）
- ・ 「24時間活用」という理念、キャッチコピーとは別に、現実にはどこまでやるのかということがある。（中島委員）

- ・ 深夜は交通機関がなくなるという問題もある。(中井委員)
- ・ 渋谷の東急文化村では携帯電話が通じず、若者が集まらないということがある。そういう使われ方の差別方法もある。(小林会長)
- ・ 映画鑑賞のマナーなど、映画館を使った体験学習を小学校の子どもたちに対して行ったが、このように、公共空間を子どもたちに体験学習させることが札幌市のためになる。(中島委員)
- ・ 退職した市職員が子どもたちにまちづくりなどを分かりやすく説明するというような教育も考えられる。(小林会長)
- ・ やる気のある現職員がボランティアで行うということも考えられる。(事務局)

#### **意見交換 次回のテーマを踏まえて**

- ・ 住んでいて良かったと思えることがまちづくりの基本だと思う。(中井委員)
- ・ まちづくりでは市民の関心が一番高い部分とそうでない部分をプッシュすることが必要。前者はそれが大きな反応を生むからで、後者は前者だけだとまちの成熟度は上がらないからだ。(中島委員)
- ・ 各委員から出されたアクションプランを組み合わせ、相乗効果の出る提言がつけられればいい。(林委員)
- ・ 活動している市民を知ってもらうようなチャンスがつけられたらいいと思う。(大坂委員)
- ・ ビジョンの成果指標だが、議論の中にその内容は出てきている。この部分も委員から出していきたい。(小林会長)